

令和8年度 全国学力・学習状況調査 箱根町立小・中学校の調査結果について

令和8年4月23日に実施された全国学力・学習状況調査の箱根町の結果を次のとおりまとめました。

1 調査の目的（文部科学省より）

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ◇学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

2 調査の概要

箱根町では、4校88人の児童生徒が参加

（内訳：町立小学校3校6年生44人 町立中学校1校3年生44人）

3 調査内容

（1）教科に関する調査（国語、算数・数学、英語）

中学校英語は、文部科学省 CBT システム (MEXCBT) によるオンライン方式 (CBT: Computer Based Testing) で実施します。

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

（2）質問調査（文部科学省 CBT システム (MEXCBT) によるオンライン方式にて実施）

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査 (例) 学習に対する興味・関心、授業内容の理解度、基本的生活習慣等、家庭学習の状況 など	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 (例) 授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など

4 調査時間

小学校（児童質問調査は、各学校の状況に応じて、調査時間を設定してオンライン方式で実施。）

4月23日 (木)	1時限目	2時限目	※4月24日～5月8日のうち1日
	国語(45分)	算数(45分)	児童質問調査(20分程度)※

中学校（英語「読むこと」「書くこと」「聞くこと」・生徒質問調査は4月20日（月）に実施。）

4月23日 (木)	1時限目	2時限目	英語「読むこと」「書くこと」(50分程度) 「聞くこと」・生徒質問調査(50分程度)
	国語(50分)	数学(50分)	

中学校 英語「話すこと」

4月28日(火)	英語「話すこと」(20分程度)
----------	-----------------

※中学校英語、生徒質問調査はオンライン方式で実施。

5 結果の概要

(1) 教科に関する調査結果の分析内容について

◆小学校【国語】

「言葉の特徴や使い方に関する事項」に関しては、おおむね定着していた。ただ、「ふしぎ」を「議」としていない誤答が4割あり、漢字のもつ意味を考えて使う習慣が身に付くようにすることが大切である。

「情報の扱い方に関する事項」では、考えとそれを支える理由や事例、文章の全体と中心など、情報と情報の関係を理解することに課題が見られた。

「話すこと・聞くこと」では、言葉の説明だけでは分かりにくい内容や注目してほしいところを、動画を活用して考えが伝わるよう表現を工夫していることを問う問題で、音声言語と映像の目的や意図を捉えられていない児童が半数程度いた。

「書くこと」では、「暑い夏を快適に過ごすための衣服のくふう」について調べて書かれた文章の続きを書く問題の正答率が低かった。本の題名や本文の一部の抜き出し、その部分をかきかっこでくくるなど引用部分と自分との考えを明確にし、区別して書くことができていない解答が3割あった。

「読むこと」では、文章を読んで考えたことを文章中の言葉や文を取り上げて、自分の経験と結び付けてまとめて書く問題は、全国平均と比較して正答率が低く、無解答率も3割を超えていた。今後も引き続き、目的に応じて複数の情報や資料を関連付けながら自分の考えをまとめられるような力を身に付けさせることが重要である。

◆小学校【算数】

全国の平均正答率との差が縮まり、ほぼ全国平均に近い結果となった。

「数と計算」では、百の位の数や四捨五入して千の位までの概数で表すこと、与えられた3つの数を使って条件に合う小数をつくるのがよくできていた。しかし、整数と小数の減法の計算ができていない児童、単位分数の個数に着目し、数直線上の1を表す目盛りを捉えることができていない児童がそれぞれ半数近くいた。

「図形」では、直方体の箱の形を構成する面についてよく理解できていた。体積の意味も理解できていたが、立方体の体積の求め方と正方形の面積の求め方を混同している児童が2割ほどいた。

「変化と関係」では、3問すべて全国平均を上回った。正答率そのものは4割程度であったが、示された除法の式の意味を理解して1㎡当たりのペンギンの数を捉えたり、図から基準量・比較量・割合の関係を捉えたりする問題について、全国と比較して正答率がかなり上回っていた。

「データの活用」では、帯グラフの読み取りは比較的できていたが、集計の誤りを見付けその根拠を表の中の数と言葉を用いて記述すること、二次元の表の2つの観点を捉え各欄の意味を理解することに課題が見られた。

今年度は「図形」「変化と関係」領域について成果が上がった。「数と計算」領域は、小数の計算や分数の仕組みなどを復習しておきたい。「データの活用」領域は、資料の分類整理の仕方を確認したり、表やグラフから見いだしたことを表現したりする活動を大事にしていきたい。

◆中学校【国語】

「言葉の特徴や使い方に関する事項」に関しては、おおむね定着していた。ただ、文脈に即して正しい漢字を書いたり使ったりする問題や語句の辞書的な意味を踏まえ文脈上の意味を捉える問題の正答率は低かった。

「話すこと・聞くこと」では、話し合いの中の発言に対する質問が、自分の理解が合っているのかを確かめているものであると捉えられない生徒や、互いの発言を取り上げながら自分の考えと理由を述べることができない生徒が半数程度いた。

「書くこと」では、気持ちがより伝わるように比喩的な表現や反復、行為や心情を表す語句などを使って生徒全員が描写できていた。一方、表現の工夫とその効果についてよい点や改善点を見出し、書く活動へ生かす具体的な視点を記述する問題の正答率は低かった。

「読むこと」では、擬音語・擬態語について説明した文章を読み、2つの例文を比べて擬態語「きっぱり」の効果を書く問題の正答率が低かった。具体的な様子は書けたものの、本文中の言葉を使って効果を書くという条件を満たせなかった解答が5割もあった。また、2割が無解答であった。

文章を読み理解したことに基づき、自分の考えを形成する力を養っていくことが必要である。

自分の考えを書いたり話したりする際に、相手に分かりやすく伝わるよう、理由を示すことを意識させていくことが必要である。

◆中学校【数学】

全国の平均正答率との差が前年度より大きく、特に「図形」「データ活用」領域に課題が見られた。

「数と式」では、正の数で表された気温から負の数で表された気温をひいた差を求めること、同類項の意味理解などが比較的できていた。反面、条件を変えた場合に成り立つ性質を予想する問題で、数学的に説明する力に課題が見られ、解答類型にない誤答の割合が多かった。

「図形」では、考察の対象となる角の大きさを捉えることができていない解答が多かった。また、与えられた条件を整理して、証明する事柄の仮定を見いだすことが難しかったようである。

「関数」では、与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることが比較的できていたが、反比例の関係を捉えて、 x の値に対応する y の値を求めることに課題が見られた。

「データと活用」では、2つのさいころの目の出方の起こり得るすべての場合を、12通りや6通りと考える生徒が多かった。箱ひげ図と四分位数の対応について理解できていない生徒も多かった。

今後は、基礎基本から丁寧に取り組むことはもちろんのこと、正答数分布グラフ（低得点層に偏り）を分析し、授業改善や個別最適な指導について考えていく必要がある。

◆中学校【英語（「話すこと」以外の3技能）】

調査を受けた生徒全員が取り組んだ共通問題（7問）に焦点を当て、その結果を中心にまとめていくものとする。

平均正答率は、全体を通して全国平均を下回った。しかし、「聞くこと」では、「店員と客の会話を聞いて客の注文したものを判断する問題」において、正答率が全国平均を上回った。小学校段階から英語の音声やリズムに慣れ親しむ学習経験の積み重ねによって、必要な情報を正確に聞き取る力が少しずつ育まれてきていると考える。

「書くこと」に関しては全国平均を下回っており、苦手意識が見られる結果となった。なかでも「社会的な話題に関して読んだことについて、考えとその理由を書く問題」では、正答率が低く、無回答も目立った。自分の考えを書くことはできているが、その理由を書くことに課題がある生徒が多かった。自分の考えを書いたり話したりする際に、読み手や聞き手に伝わるよう、理由を示すことを意識させることが必要である。また、基本的な語法や文構造等に関する理解ができていないことも考えられるので、自分が書いたものを修正させるなどの手立てを講じることも必要である。

「読むこと」では、文章を読み、書き手が最も伝えたいことを読みとることに課題が見られた。全体の概要を大まかにつかむ読み方と特定のデータや予定を瞬時に探し出す読み方を意識的に使い分ける等、目的をもったリーディングが必要である。

(2) 児童生徒に対する質問調査（オンライン方式）結果の分析内容について

【小学生の質問回答より】

- 「先生は、よいところを認めてくれる」、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」の項目について、肯定的な回答が全国平均を上回った。学校の全職員で児童をほめる・認める教育を推進してきたことに加えて、児童一人一人に対して丁寧に関わり、指導・支援してきたことの成果だと考えられる。
- 「学校の授業以外で、英語を使う機会がある」と答えた児童の割合が令和5年度の同調査と比べると増加しており、全国平均も上回った。ICTを活用した他国小学生との交流や当町を訪れる訪日外国人観光客に向けたインタビュー等の実践により、英語で自分の考えや気持ちを伝え合う活動を充実させたことが成果として表れてきている。
- 「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる」の質問に対して、全ての児童が肯定的に回答した。教科等の学習や学級活動の中で対話的な学びを積極的に取り入れてきた成果であると考えられる。
- 「学校の授業時間以外における1日当たりの学習時間」について、「1時間以上」と回答した児童の割合は、全国平均をやや下回った。「不規則な就寝・起床時刻」に加え、「1日当たりのSNSや動画視聴する時間」について「3時間以上」と回答した児童が半数以上見られた。携帯電話等を扱う上でのルールやマナー、学習習慣づくりについて学校と家庭で連携しながら考え、取り組む必要がある。

【中学生の質問回答より】

- 「人が困っているときは、進んで助けている」、「いじめは、どんな理由があってもいけない」と回答した生徒は9割以上で、全国平均を上回った。箱根ハートフルプログラムの取組や道徳科を中心とした道徳教育により、他者と共によりよく生きるための道徳性が養ってきていると考えられる。
- 「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの活動に取り組んでいる」、「総合的な学習の時間では、PCやタブレットなどのICT機器を使って、うまく情報を集めたり、整理したり、発表したりしている」と回答した生徒の割合は全国平均を上回った。また、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」と回答した生徒の割合も全国平均を上回っていることから、ICT機器を活用した総合的な学習での探究のプロセスが、他教科の学びにもよい影響を与え、自ら学ぶ意欲へとつながっていったと考えられる。
- 「英語の勉強は好き」については、肯定的な回答をした生徒の割合は全国平均を上回ったのに対して、「国語の勉強は好き」、「数学の勉強は好き」では肯定的な回答の割合が、どちらも全国平均を下回った。園小中一貫教育を推進していく上で、苦手意識の要因を的確に把握し、その解消に努め、小中の学びの接続を円滑にしていく必要がある。
- 「学校の授業時間以外に、毎日30分以上読書をしている」と回答した生徒の割合は全国平均を上回ったが、「全く読書をしていない」と回答した生徒が半数以上いた。読書に取り組む習慣づくりについては、学校と家庭で連携しながら考えていく必要がある。
- 「学校の授業時間以外における1日当たりの学習時間」及び「学校が休みの日の1日当たりの学習時間」について、1時間以上勉強している生徒の割合は、どちらも昨年度よりも減少しており、また全国平均を大きく下回っていることから、学習習慣づくりの取組について家庭と共有し、定着が図られるように努める必要がある。